

1月18日(日) サムエル記第一17章31~33節

「あの男のために、だれも気を落としてはなりません。このしもべが行って、あのペリシテ人と戦います。」(32節)

ダビデの言ったことが人々の耳に入り、それがサウルにも告げられました。サウルがダビデを呼び寄せると、ダビデはサウルに「あの男のために、だれも気を落としてはなりません。」と言います。だれもと言っていますが、これは婉曲的な表現で、ダビデはサウル王に対して「気を落としてはなりません。」と言っているのです。ここからもダビデのサウル王に対する気遣いであったり、彼の謙遜さを見ることができます。ダビデは、「このしもべが行って、あのペリシテ人と戦います。」と言います。しかし、サウルは「おまえは、あのペリシテ人のところへ行って、あれと戦うことはできない」と言い、許そうとはしません。「おまえはまだ若いし」というのは、年齢のことよりもダビデには戦いの経験がないことを言おうとしているのでしょう。一方のゴリアテは、若いときから戦士だだと言われています。(33節)ここでダビデがゴリアテと一対一で戦うことを許さなかったのはサウルにとっては当然のことです。それは、ダビデが負けるのは目に見えているからであり、もしダビデが負ければ、イスラエルの民がペリシテ人の奴隷となって仕えなければならないからです。(9節)

ダビデは、ここで「あの男のために、だれも気を落としてはなりません。」とサウルを励まします。信仰に立つ人は、そのようにして必ず周りの人を励ますことができます。私たちの周りに気落ちしている人はいないでしょうか。励ましを必要としている人はいないでしょうか。ぜひ信仰によって周りの兄弟姉妹を励ます者でありたいと思わされます。逆に、信仰による励ましを必要としている人はいないでしょうか。主は、必ず教会の中に、あなたの信仰を励まし、ともに祈る人を与えてくださいます。そのようにして信仰によりともに励ましたり、励まされることで、私たちは、ともに主にある交わりが強くされ、信仰が成長させられていくのです。

1月19日(月) サムエル記第一17章34~37節

「獅子や熊の爪からしもべを救い出してくださった主は、このペリシテ人の手からも私を救い出してください。」(37節)

若くて戦いの経験がないと言われてもダビデは決して引き下がりませんでした。戦いの経験はなくても、ダビデには羊を飼った経験があり、特に羊を猛獣の手から救い出した経験を語ります。旧約時代を通じて、獅子や熊は、パレスチナおよび近隣の国々に広く分布していました。熊は、ダビデの時代には、ヘルモン山地にまで棲息域を広げていたと言われていています。一般的には、獅子の方が行動の予測がつきやすいので安全だと言われていて、熊は何をするか分からないので危険だと考えられていました。特に37節に「熊の爪」とありますが、熊は前足の一撃で敵を倒すことができました。最近では、人里に熊が出て来るので気をつけるようにと言われていますが、熊に遭遇した時の恐怖は、相当なものがあります。しかし、ダビデは決して自分の力で獅子や熊を倒して、その口から羊を救い出したとは思っていませんでした。明確に彼は「獅子や熊の爪からしもべを救い出してくださった主」と言っています。その主が若い時から戦士であったゴリアテの手から自分を救い出してくださると、ダビデは信じていたのです。それと

同時に、ダビデは「この無割礼のペリシテ人も、これらの獣の一匹のようになるでしょう。生ける神の陣をそしったのですから。」と言います。つまり、生ける神の陣をそしったことに対して、決して主が放っておかれることはないと信じていました。すなわち、ゴリアテに対しても主がふさわしいさばきを下されると信じていましたし、自分を通して主はゴリアテにさばきを下されるのだとダビデは信じていたことでしょう。

ダビデのように過去に主によって助けられたり、祈りが聞かれたというような経験が、私たちの信仰を強くし、困難があっても、心配や恐れなくさらなる一步を踏み出させます。そのような経験はあるでしょうか。もしあれば、ぜひ周りの方々と分かち合ってみてください。

1月20日(火) サムエル記第一17章38～40節

「これらのものを着けては、歩くこともできません。慣れていませんから」(39節)

サウルはダビデに「行きなさい。主がおまえとともにいてくださるように。」と言って戦いへと送り出します。その前にサウルはダビデに自分のよろいかぶとを着けさせました。頭には青銅のかぶとをかぶらせ、身によろいを着けさせました。さらに、よろいの上に剣も帯びて、相当な重武装です。しかし、戦いに出たことのないダビデにとっては、そのような装備には慣れていなかったのだから、歩くことすらできませんでした。ダビデは、それを脱ぎ、杖を手にとって、五つの滑らかな石を川から選んで、投石袋に入れ、石投げを手にしてゴリアテに近づきました。

ダビデは、これまでどおり羊飼いの使う杖と投石袋の中の五つの滑らかな石で戦おうとしました。まさに、これはダビデの信仰の現れです。すなわち、「獅子や熊の爪からしもべを救い出してくださった主は、このペリシテ人の手からも私を救い出してくださいませ。」ということなのでしょう。そして、ペリシテ人との戦いは、ダビデにとっての何か特別な出来事というよりも、羊飼いダビデの日常生活の延長で起こったという意識がダビデにはあったように思います。私たちも、日々の生活の中で思いがけないような大きな出来事が起こった時に、特に自分にとって良くないことが起こると、あわてふためぎ、おじ惑い、心配で夜も眠れないということがあるかもしれません。その時に私たちはダビデがサウルのよろいかぶとで重武装したように、ありったけの信仰をもって対処しようとしています。しかし、すべては主の許しの中でなされます。主がすべてをご存じであり、主が必ず私たちを最善に導いてくださいます。よろいかぶとはすべて脱ぎ捨てて、その主にすべてをゆだね、自分のなすべきことをただすればいいのです。主は、過去において助けてくださったように、常に私たちを守り、導き、支えてくださいます。

1月21日(水) サムエル記第一17章41～44節

「ペリシテ人は、ダビデに目を留めて彼を見つめ、彼を蔑んだ。」(42節)

ゴリアテは、「盾持ちを前に立て、ダビデの方にじりじりと進んで来た。」とありますが、ゆつくりとダビデの方へと進んで来たということです。一対一の戦いと見せかけて、どこかにイスラエルの兵士が潜んでいることを警戒したのではないかと思われれます。ゴリアテは、ダビデに目を留めて彼を見つめ、彼を蔑みました。なぜなら、ダビデが本当に自分の戦う相手なのだろうかと思ったからです。ダビデのことが「血色の良い、姿の美しい少年」と記されています。ま

だまだ彼が若いと思ったのでしょうし、恐らくその若さでは戦争に出た経験もないはずだと思ったに違いありません。「人はうわべを見るが、主は心を見る」(16章7節)とありますように、人はうわべで判断し、時には誰かを蔑むことさえあります。それは、世の人が私たちの信仰を見る時にも同じです。自分たちの考えや常識などから、信仰をうわべだけで判断して、自分たちには必要がないものだと考えることもあるでしょう。しかし、それでも恵みによって、主を求める者が必ず起こされると信じて祈りましょう。

43節では「おれは犬か。杖を持って向かって来るとは」と言います。おそらくペリシテ人の代表選士ゴリアテは、しっかりと武装をしていたことでしょう。それに引き換えダビデは、杖と投石袋を持っていただけでした。ゴリアテが驚くのも無理はありませんし、馬鹿にしているのかとも思ったことでしょう。ゴリアテと同様に世の人々は、自分をさまざまなもので守ろうとします。家柄、富、学歴、仕事の経歴などです。しかし、私たちもしばしば経験することですが、世の中にあっては何が起こるか分かりません。そのような時に、多くの人が自分を守ってくれると信じていたものが、実は自分を守ってくれるものではなかったことに気がついて愕然とすることがあります。その一方で、周りの人は私たちの信仰をまるで何の役にも立ちそうもない単なる杖のようなものと思うかもしれません。しかし、信仰による杖は、私たちを導き、私たちを支えてくれるものであることを多くの人々は知るでしょう。まさに、ダビデの杖のように、信仰こそ私たちを守る杖なのです。

1月22日(木) サムエル記第一17章45～47節

「おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、私は、おまえがそしたイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かう。」(45節)

45節「おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、」とありますので、ゴリアテがいかに重装備であったかが分かりますし、そのような装備に彼自身が頼っていたことが分かります。その一方で「万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かう」とありますように、ダビデは主に対する信仰によってゴリアテに立ち向かおうとしています。私たちは日々の信仰生活の中で、しばしば自分の信仰が問われる場面に出くわすことがあるでしょう。そのような時に私たちが持っている信仰は、私たちに力強く一步を踏み出させる力と勇気を与え、確信と平安を与えてさらに私たちを前へと進ませるのでしょうか。

46節で「今日、主はおまえを私の手に渡される。」と、ダビデはゴリアテと戦う前から勝利を確信していました。これが信仰です。信仰によって私たちは将来の主のみわざによる勝利を確信することができるのです。さらにダビデは、「すべての国は、イスラエルに神がおられることを知るだろう。」と言います。つまり、周りのすべての人々がイスラエルに驚くべきみわざをなす神がおられることを知るために、それとイスラエルの民が自分たちとともに主なる神がいてくださることを知るために、主はみわざをなされるというのです。昔も今も変わることはない主なる神は、今もみわざをなして、ご自身の栄光を現わされます。それは、人々が生けるまことの神がおられることを知り、このお方を信じることができるようになるためであり、私たちの信仰がさらに強くされるためです。さらに主がみわざをなして、ご自身の栄光を現わしてくださるように祈りましょう。

47節で、ダビデは「この戦いは主の戦いだ」と言います。つまり、主の戦いならば、主の戦いの方法があるということです。その一つが「剣や槍がなくても、主が救いをもたらすことを知る」ということ、つまり、人の手によらないかたちでの勝利を主は与えられるということです。私たちは、常に主が戦われる主の戦いをともに戦っています。その中で、主がすでに勝利を約束してくださっていることを信じて感謝しましょう。それとともに主が戦っておられることを決して私たちが妨げることがないようにしましょう。「やめよ。知れ。わたしこそ神。」(詩篇46篇10節)とありますように、まずは、主がどのような方かを深く知り、主への信仰を増し加えさせていただきましょう。

1月23日(金) サムエル記第一17章48～51節

「ダビデは、石投げと石一つでこのペリシテ人に勝ち、このペリシテ人を撃って、彼を殺した。ダビデの手に剣はなかったが。」(50節)

48節で特筆されているのが、ダビデとゴリアテの動きの速さが対照的だということです。ゴリアテは「ダビデの方に近づき始めた」とあり、ダビデの方へと向かうだけでも時間がかかっている印象です。その一方で、「ダビデは、すばやく戦場を走って行き」とあり、非常に敏捷に動く印象があります。ダビデは、一つの石を石投げで放って、ペリシテ人の額を撃ちました。そうしますと、石は額に食い込み、ゴリアテはうつぶせに倒れました。

50節の「ダビデは、石投げと石一つでこのペリシテ人に勝ち」とは、ダビデとゴリアテの戦いの結果の要約であり、「このペリシテ人を撃って、彼を殺した。ダビデの手に剣はなかったが」とありますので、51節でダビデはゴリアテから剣を奪って、ゴリアテにとどめを刺し、首をはねました。このことは、「私はおまえを殺しておまえの頭を胴体から離し、今日、ペリシテ人の軍勢の屍を、空の鳥、地の獣に与えてやる。」(46節)のダビデの言葉の成就です。

まさに、これはダビデの信仰がそのまま成就したことを私たちに示しています。47節「ここに集まっているすべての者も、剣や槍がなくても、主が救いをもたらすことを知るだろう」とダビデは言います。まさに、剣や槍を持たなかったダビデがゴリアテに勝ちました。50節に「ダビデの手に剣はなかったが」とありますが、それはまさに剣がない状態でダビデがゴリアテに勝ち、主がイスラエルに勝利もたらされたことを強調しているとも言えます。そして、まさにこの戦いは、主ご自身の戦いでもあり、主が勝利し、主が救いをもたらされたと言えるでしょう。私たちが、主への信仰を持って歩むなら、主は私たちの信仰にこたえて必ずみわざをなしてください。恐れず、思い煩わず、主への信仰を持って日々歩んでまいりたいと思わされます。そして主が私たちの信仰に答えてくださる時に大いなる主のみわざをみさせていただくではありませんか。

1月24日(土) サムエル記第一17章51b～54節

「ダビデは、あのペリシテ人の首を取ってエルサレムに持ち帰った。しかし、武具は自分の天幕に置いた。」(54節)

ペリシテ人たちは、ゴリアテが死んだのを見て、あわてて逃げました。なぜなら、イスラエル

軍に捕らえられることを恐れたからです。もし、ペリシテ人がイスラエル軍に捕えられれば、9節でゴリアテが語ったように彼らの奴隷とされるからです。

イスラエルとユダの人々は立ち上がって、ときを声をあげて、逃げるペリシテ人をガイの谷間に至るまで、そしてエクロンの門まで追いました。そしてペリシテ人は、刺し殺されて倒れました。イスラエル軍は、無人のペリシテの陣営から略奪品を持ち出し、ダビデはゴリアテの首を取ってエルサレムに持ち帰りました。このようにして、イスラエル軍は大勝利を収めたのです。

ダビデがゴリアテを討つまで、イスラエルは「気をくじかれて非常に恐れていました。」それこそイスラエル軍は敗北意識に陥り、自分たちはペリシテに連れて行かれて奴隷とされるに違いないと思っていたことでしょう。しかし、ダビデがゴリアテに勝利したことが、イスラエルの民を勇気づけ、恐れずペリシテを追撃する力を与えました。ダビデ一人の信仰による勝利が、イスラエルの共同体全体に信仰を呼び覚まし、信仰による力と勇気を与えたのです。不信仰や不平や不満は、教会の中にあつという間に広がります。それは一瞬にして教会から一致を奪い、信仰を停滞させます。しかし、一人の信仰による励ましは、教会をどれほど力づけ、信仰を呼び覚まし、祈りの手を上げさせ、信仰をもって一致しながら、ともに前進させる力となっていくことでしょう。あなたは、これまで信仰によって教会を励まし、力づけて来たでしょうか。それとも、不信仰による不一致の種を教会に蒔き続けてきたでしょうか。願わくば、私たちが、自分たちの小さな信仰によって教会全体と兄弟姉妹の一人一人を励ますことができますように。